

NO.28

June 2002

CIEC Newsletter

CONTENTS

より密な会員交流のためのニュース
レターをめざして 矢部正之 2

<CIEC研究会活動のクリエイター>
カンファレンス委員雑感
小野 進 3

まとめる、交渉する、そして協同する
板倉隆夫 4

「情報」をめぐる雑感
鳥居隆司 5

<団体会員の紹介>
株式会社メディアヴィジョン 6
株式会社ニュー・メディア・
エデュケーション・システムズ 7

<インタビュー>
『エデュケーション・ソフトウェア
カタログVol.13 2001~2002』 8

お知らせ

運営委員会だより 9
CIECメーリングリストから
confpro-ctl@ciec.or.jpの立ち上げ 10
2002PC カンファレンス企画概要 11
2002年CIEC定期総会、研究会報告 12

個人会員数689名
教員493名 大学職員19名
院生44名 学生14名
生協職員74名 企業21名
その他24名
団体会員数95団体
企業33 生協58 大学1 高校1 法人2

*CIEC会員状況(2002.6.25現在)

2002PC カンファレンス 8月6日~8日

事前参加申込締切は7月20日をメドにお願いします。

下記のサイトからお申し込みください

<http://www.ciec.or.jp/event/2002/>

CIECニューズレター
2002年6月30日発行
編集：CIEC事務局

発行：CIEC(コンピュータ利用教育協議会)
〒166-8532 東京都杉並区和田3-30-22 大学生協会館
TEL03-5307-1195 FAX03-5307-1196
e-mail: ciec-jim@ciec.or.jp URL <http://www.ciec.or.jp/>

より密な会員交流のための ニュースレターをめざして

矢部 正之
(副会長・広報担当)

CIECでは、様々な機会をとらえて、会員の皆様との情報交流を行ってきております。ニュースレターは年4回、会誌発行の合間に紙で発行して参りました。詳細な研究会の報告、理事会や各種委員会の報告、会員間の情報交換など、年2回発行の会誌ではカバーしきれないCIECの活動の記録と会員交流が記事の中心をなして来ました。

この方針は、今後も堅持して行く所存ですが、ニュースレターの発行体制・コスト・実効性などを考え、内容や発行形態、頻度などを再検討し、より効果的なものになりたいと考えています。現在、検討を始めており、一部はすでに実施されているものもありますが、ここで検討中の課題も示して、皆様のお考えをお聞かせいただきたいと思います。

基本の方針として、種々のCIECの活動を会員に案内・報告することが従来通り中心ですが、さらに、団体会員も含めた個々の会員間の情報交流に力点を置いた紙面を目指しています。これに伴ない、

従来紙数の多くを占めていた研究会報告の詳細は、Webでの公開を基本として、ニュースレターでは概要の報告に留めます。これに加えて、会員の活動紹介（会員の声・動静、団体会員からの情報や提案）など会員から直接情報を提供していただくことや、テーマを絞った連載、会員の研究室訪問記、教育の対象となる学生の取材などの企画で、交流を更に広げる努力をしたいと考えています。特に、CIECの大きな特徴でもある企業・団体会員との交流をより深めるために、団体会員からの情報発信が気軽にできる場としてニュースレターを活用する方策を検討しています。

これによって、色々な意味で、非常に幅広い背景を持つCIEC会員にとって、ニュースレターがより魅力のある交流の場となるようにして参ります。

かなり風呂敷きを大きく広げた構想ですが、これを種々のコストをなるべく低く抑えて実現できるようなシステムを検討中です。

詳細情報の公開についてはWebで行うようにすること、さらに、ニュースレター自身も電子化をしてメールマガジンなどの方法で発行・配布のコストを削減すること、情報をためずに1回の情報量は抑えてより頻繁に、より機動的に発行して会員との交流の密度を上げること、などが検討されています。現在、ニュースレターの編集は事務局が中心になって行われていますが、今後、発行体制の整備を図ると共に、検討事項の可能なところから順次、刷新をして参ります。

会員の皆様には、投稿のお願いやら、取材のお願いやらでご協力をお願いすることもあるかと存じます。会員が生の声で直接交流できるよう心がけるつもりですので、ニュースレターの刷新についてのご提案も含め、ご協力をお願いいたします。なお、会員のより直接的な交流の場として、メーリングリスト（CIEC ML：ciec@ciec.or.jp）も用意して、ニュースレターと相互に補い合いながら、CIECの会員としての実感とメリットを共有できるより親密な会員間交流が可能になるよう努力して参ります。

カンファレンス委員雑感

小野 進（カンファレンス委員会）
（東京大学大学院人文社会系研究科・文学部）

编者から「CIEC委員会活動のリーダーたち」というタイトルで自己紹介を書くように依頼を受けたが、どうも筆が進まない。第一、リーダーの自覚がまるでない。少しでもそのような意識を持って、CIEC活動に参画していれば何某かのヒントが見つかるのだが、これではひねり出しようがない。そもそも学会への参画は、それがどのようにアクティブなものであっても、知への好奇心と自発的な要求によって成り立つべきものと私は考えているので、とりたててリーダーと呼ぶべき人は要らないのではないかと考えている。たまたま役員として何かを企画しなければならない立場におかれた人は、コーディネータでありプロポージャーでしかない、いわば「黒子」的存在だと思うので、このような拙文をいざ寄せるとなるとほとんど困ってしまう。

前置きが長くなったが、私がCIECに関わりを持ったのは、嘗て大学生協で教職員活動に参加していたためであろう。今から12年ほど前に全国教職員・院生委員会の活動を降りたが、余程暇をもてあましていたと思われたのか、CIEC起ち上げの規約起草委員に呼び戻された。頼まれるとむげに断れない性格が仇となったのはこれが始まりではないのだが、ここでもズルズルとCIECが正式な組織として形成されると理事になってしまった。以来、まったくその器ではないのだが6年間の長きにわたってカンファレンス委員会にハマってしまった。振り返ると本当に十分な活動ができていないことに自省の念を強く抱く。

自分としての考えも多々あるが、ここでは触れないでおく。ただ、一つだけ言わせて頂くと、カンファレンス委員会はコーディネートする役割が大変大きく、いかに会員とのコンタクトをキチンととりきれるかが重要な鍵となる。700人を超える個人会員と80を超える団体会員の多様な学術的な資産をどのように結びつけ、プライオリティを明確にするかが問われるセクションと言えよう。

私は映像表現論らしき分野をフィールドとしている。大学での役割はもっぱら映像づくりや画像、音声などのデジタル処理に追われている。人文系もようやくコンテンツを蓄積していく姿勢を持つようになった。これからは、噂される独立行政法人などの動き次第では、有形、無形の「資産」を如何に豊に持ちきれるかが問われてこよう。人文系には沢山それが存在すると私は思っている。

趣味は、山歩きや音楽を聴くことなどであるが、最近では時間がとれずにフラストレーションがたまる一方である。山歩きは、以前はもっぱら南アルプス一辺倒であった。聖岳、荒川岳などはやはり好きな山である。3年ほど前に南アの甲斐駒ヶ岳の黒戸尾根に挑戦したが、さすが30年前とは違い、年を痛切に感じた。それでもなお、今年には早川尾根を歩くことを目指している。

CIEC

まとめる、交渉する、そして協同する

板倉隆夫（ネットワーク委員会）
（鹿児島大学・水産学部）

自己紹介をということですが、今回は、私のCIEC活動の支えとなっている、学内におけるボランティア的活動について話したいと思います。学内では、3つのWGで活動しています。

・鹿大ホームページからストリーミングによる大学広報へ

鹿大広報委員会「ネットワーク利用広報推進WG」を、いろいろ掛け合って作りました。ホームページの維持管理は、教官がボランティアでやる時代ではなくなってきていますが、ストリーミング配信の方は先端的な取り組みも含んでおり、予算獲得も学長裁量経費などでまずまずです。昨年春「入学/卒業式のインターネット放送もやってくれないか。」と電話で学長に頼まれ、当然のことながらお受けしたのですが、無線LANで県立体育館と結んでの配信は、ちょっと大仕事となっています。それにライブは一発勝負ですから、チビまる子ちゃんみたいに額に縦線が入ったこともしばしば。

・BBC/CNNのストリーミング配信から英語教材の制作へ

5学部、2つの学内施設、そして学外から人材を結集し、いくつかのPJに参加しています。この活動は、7年ほどやってきた学内ネットワーク活動（Unix MLなど）の人の繋がりが、将来構想委員会の下のWG（BBC、CNNのストリーミング配信などを実現しました）となって語学教官も加わり、さらに自由参加の学内合同PJで予算を獲得するようになったものです。我々は、配分予算を（よくあるように）個人に配分するようなことはせずに1つにまとめ、鹿児島大学に必要なものを購入しています。アジアサット2の受信設備も設置しました。

・稲盛会館をインターネット放送スタジオに

「稲盛会館ネットワーク利用WG」もいろいろ掛け合って作っていただきました。「京都賞受賞者講演会」のインターネット放送も稲盛財団によって許可されました。思い起こせば2年前、配信用PCを（ちょっと強引に）夜中に会館に運びこんだことから始まったのでした。

さて、これらのWG活動においては、多くの「交渉事」がありました。WGへの参加要請に始まり、BBCの英国本社を絡めての交渉（LAN配信は世界初）、学内予算の獲得などなどです。私は、交渉においてできる限り高い妥協点を見いだすには、

自分たちと相手のそれぞれが望むことの、価値と困難さの正確かつ迅速な把握が大事だと考えています。人の気持ちと技術的なことの両方です。次に、集団で活動するには「まとめ」ないとはいけませんが、私の鉄則は、

自分は潤わないこと（個人的にはもちろん、研究室としても）です。予算執行において、信頼され得る、公平かつ迅速な判断をするためには、自分の研究費から少々持ち出しになっても致し方ないと考えています。

このような私の進め方が成功しているかどうか分かりませんが、フリーな立場でありながら何年もWGに集い活動して下さる多くの先生方、実験的活動を特別許可して下さる社長さん、と立場の異なる人たちの、まさに協同の場が生まみ出されているように感じています。私のライフワークとも言えるCIEC TypingClubの活動においてもまったく同様です。本職は、まったく違う分野で「微量のダイオキシンの反応して光るメダカ」を遺伝子工学的に作ったりしていますが、毎日2回の学生とのゼミ（これも協同？）も私の日CIEC

「情報」をめぐる雑感

鳥居 隆司（カンファレンス委員会）
（椋山女学園大学）

最近、ある自治体とわかりやすい情報の検索や提供を可能にするシステムを構築するという仕事をする機会がある。具体的には、管理部署ごとや内容などによっていろいろに分類されている様々な情報を横断的に自由に検索する。そして、目的の情報の他にそれに関連する必要かもしれない新しい情報を見つけさせてくれるというものだ。結局、エシュロンのように人の話に耳を傾け、自治体の掲示板などの書き込みから人々が何を求めているかを理解できる超高性能な人工知能のようなシステムを実現する必要があるかにも思われる。

しかし、自治体から発信される情報にしても、そもそも情報は、「もの」とか「こと」とか「事件」とか「現象」などの伝達と考えられる。科学的に考えると「もの」や「こと」は、人に伝えないと意味はなく、これらを受け取った人がこのことによってなにかを行うことになってはじめて意味がある。私の実家の猫は「お手」はするが、一般に猫はあまり人の言うことをきかないので、犬をもらうことにして、芸を仕込んだりする。私は犬と暮らしたことがないのでよくわからないが、警察犬や盲導犬ぐらいになると人からの情報をたぶんわかってきているいろいろ言うことをきいてくれる。ところで、犬（犬には大変失礼で、もしかしたら人智のおよばない高度な知性を持っているかもしれない）は、超高性能な人工知能のようなものをもっているのだろうかという疑問が……。とすると、もしかして、人は、犬の発信する情報をかなり理解して、協働作業を行っているとも考えられる。ということで、これを情報を扱う機器などに当てはめて考えると、それほどものは必要はないということにもなる。

ところで、このところ、私の勤務先にコンピュータウィルスがかなり発生した。ちょうど土屋賢二先生の自宅の棚がどうなったかを考えなければ

ならない必要があり、少しの時間も無駄にできない時だった。本質的に物体というものは、探すときには見つからず、ただぼんやりなんとなく見ているときには、その姿を現す物理現象は古くから証明されている。忙しいときに限って、次々と仕事がやってくるという時間に関する法則もあった。今回がそれだった。メールサーバにもウィルス駆除ソフト、各クライアントにもウィルス駆除ソフト、ファイルサーバにももちろん導入していたにもかかわらず……。今回のウィルスは、勝手にいろいろな悪さをされた。学部では、私は、情報関係の担当なので、このあたりの対策をするために暖かい目でコンピュータを見守っているのだが、なかなか難しい。

また、情報関係の担当なので、入ってきたばかりの学生たちに情報関係の演習もする。コンピュータが大衆化してきたので、このごろの若い人は、「マウスを画面でのボタンの上でクリックしてください」と言っても、ディスプレイにマウスそのものをあわせて押す人が見られなくなった。マウスが機の端までいくと「これ以上矢印が進みません」と言う人もいなくなった。マウスのコードを自分の方に配置し、「矢印は手と逆に動くんですね」という人もいなくなった。かつては、私がそれを逆だと指摘すると、「ネズミのシッポは後ろにあります」と反論された。ほんの10年前には本当にいたのだ。しかし今はいない。これは、コンピュータが大衆化したことには原因はない。私の授業のやり方がうまくなったにちがいない。しかし、光学式マウスになり、マウスからボールが消えたので、機の端で機の裏側にマウスを移動して機の表面と裏面を仮想的な自分の机として使う人が現れた。機の裏面でマウスを使うとマウスポインタの方向も逆になるのだが……。やはり、私は前から気づいてはいたが、授業がへただった。

株式会社メディアヴィジョン

高橋 司
(Kacis 事業部 企画部)

株式会社カシスは、株式会社メディアヴィジョンと共同で、知識活動の生産性向上を実現するツール、システム、コンテンツの開発、販売を行なっています。

Kacis Publisher / Kacis Writerは、「文書作成といえばワードプロセッサ」という常識をくつがえし、驚異的な効率アップを実現する文書作成ツールです。なぜ、ワードプロセッサより優れているのか、その理由は簡単です。ワードプロセッサが電子的な「巻き物」であるのに対し、Kacis Publisher / Kacis Writerは電子的な「本」なのです。Kacis Publisher / Kacis Writerで作成する文書は、表紙、目次、本文、脚注、索引、書誌情報といった「本」の構成要素を備え、目次と本文の1対1対応によって、任意の項目にランダムアクセスできるようになっています。このため、数百ページ、数千ページにおよぶ文書であっても、快適に書くことができ、快適に読むことができるのです。しかも、Kacis Publisherなら、著作権保護機能を付加したKacis Bookを作成できるため、書いたらすぐにその文書を電子的に出版・配布できます。既に『現代用語の基礎知識』（自由国民社）、『インターネット白書』（インプレス）等のKacis Book版をダウンロード電子書店「Kacis Book.net」で販売している他、教科書、問題集、学会誌、マニュアル等の電子化受託も行なっています。

Kacis Cabinetは、膨大なファイルをきちんと管理し、効率的に検索、参照、再利用できる文書管理システムです。ファイルをサーバーに登録する際に、タイトル、作成者、日付、ジャンル等の項目を記入した「キャビネットカード」を作成します。この「キャビネットカード」を基に、タイト

ル別、作成者別、日付別、ジャンル別といった仮想的なフォルダ階層（バーチャルフォルダ）を瞬時に表示できるため、目的のファイルがどこにあるか分からないといった問題を解決できるのです。

Kacis Publisher / Kacis Writerは昨年、「ソフトウェア・プロダクト・オブ・ザ・イヤー 2001」を受賞し、フリー版のKacis Writer Freeはソフトウェア・ライブラリサイト「Vector」の文書作成カテゴリで人気No.1となっています。対象ユーザーは、膨大な情報を作成・管理・配信する必要のあるナレッジ・ワーカーであり学生です。早稲田大学メディアネットワークセンターがKacis Writer3,000ライセンスを採用したのをはじめ、各大学、研究機関、官公庁、企業に相次いで導入されています。e-Learningの世界で「電子的な教科書、ノート、論文、資料の作成・管理・配信をどうするか」、「生徒ひとりひとりに合った個別学習をどうするか」といったテーマはきわめて重要ですが、それを解決できるのがKacis 製品なのです。

CIEC

東京都千代田区九段北1-14-21
九段アイレックスビル3F
mailto:takahasi@mvi.co.jp
tel.: 03-3222-3149 fax.: 03-3222-7495
http://www.mvi.co.jp/ http://www.kacis.net/
http://www.kacisbook.net/
http://kacisstyle.mvi.co.jp/

ニュー・メディア・ エデュケーション・システムズ

教育用情報システム会社のニュー・メディア・エデュケーション・システムズ（NMES 東京都千代田区三番町24 永野恵嗣CEO）では、北米を中心にアメリカの1,000（*1）以上の大学で採用されている教育用総合支援ツール

『JENZABAR（ジャンザバー）IMS』日本語版の発売を開始しました。

JENZABAR IMSは、日本の大学教育における教育そのものの質の向上を目的とし、構成されています。

1. 講義の質の均一化と透明化

講義の運営・管理をJENZABAR IMSシステム上で一元管理することによって、講義の質の均一化と透明化が図れます。

2. 学生の講義理解度を向上

講義の予習・復習段階での情報共有が徹底されることによって、個々の学生の習得状況が把握でき、強化すべきポイントを教員、学生共に共有することができます。

3. コミュニケーションの緊密化を促進

学内情報、各種連絡や電子掲示板やメール機能などが充実しており、普段コンタクトを取りにくい人でも、簡単にコミュニケーションを行うことができます。

<主なコンテンツ>

- ・スケジュール表
- ・講義概要
- ・配布資料 / 参考私書 / Webリンク閲覧
（講義で利用する教材の登録ができます）
- ・シラバス（講義要旨）作成
- ・テスト / 課題作成（オンラインによるテストの実施）
- ・個人成績表（成績の管理が簡単にできます）
- ・掲示板（休講や変更のお知らせ）
- ・受講者名簿作成
- ・eメール

またオールインパッケージ化されたソフトウェアのため低コスト・短期間で導入が可能です。さらにテンプレートやヘルプ機能が充実しているため、特にコンピューターの知識がない人でも簡単に操作ができることも重要なポイントといえるでしょう。

近年のインターネットの普及・浸透をうけ、大学教育においてもIT化が急速に進んでいます。ここで注意しなければいけないことは、「どんなシステムでIT化を進めるか」という「IT化ありき」の考え方ではなく、「教育の原点である対面講義の効果を高めるために、ITをどのように活用するか」の視点で取り組む必要があるということです。

ジャンザバーは、このような視点から、いたずらに教育のIT化を推進したり「バーチャル」な教育環境を絶対視するようなツールではありません。むしろ、教員と学生の「リアル」な学びの場を、今日の技術により実りあるものにするためのシステムです。またこういったシステムは、大学の講義ばかりでなく、登校拒否児や学校へ行きたくてもいけない学生が自宅でできるシステム、通信教育システムとしても、多いに役立つものです。

CIEC

(*1) 米国のJENZABARは北米を中心に1000の大学で導入実績がございます。教務ERPシステムを除くJenzabar IMS(日本語版Jenzabar同様の製品)としては、120校程度の導入実績がございます。

<http://www.jenzabar-j.com/contact.html>

<商品概要>

商品名 / JENZABAR IMS
販売元 / (株)ニュー・メディア・
エデュケーション・システムズ
システム導入 / 2002年4月1日より東京農工大学
にてシステム化
この件に関するお問い合わせ先：
(株)ニュー・メディア・
エデュケーション・システムズ
TEL 03-3511-3401
FAX 03-3511-3402
担当：いわみ 石見 誠記

『エデュケーショナルソフトウェア カタログVol.13 2001～2002』

多くの研究者に支持されている「エデュケーショナルソフトウェアカタログ」。今回は編集事務局を担当している石野雅之さん（大学生協連コンピュータソリューション（CS）チーム）に、カタログについていろいろお話を伺いました。（インタビューは編集担当）

・ソフトウェアカタログが教員の方々に注目されています。まずこのカタログの発行概要は？

石野）このソフトウェアカタログは、大学生協連のコンピュータソリューションチームと全国共同仕入れ事務局が協力して編集を行っています。毎年10月に発行しており、今年は64,000部でした。全国の店舗からの注文を元に印刷していますが、ここ3年間で発行部数がほぼ倍に増えました。店舗では組合員に配布をしており、中には直接研究室にお届けしている店舗もあるようです。

・かなり充実したカタログですが、発行開始は？

石野）大学生協連のHELP計画に基づき、1991年から発行を始めました。最初はMac用の海外のソフトウェア、特に高等教育環境で使われていたインテリメーション社のソフトウェアの掲載から始めました。その後MathematicaやChemOfficeなどの海外で販売されている専門的なソフトウェアを掲載したり、1994年からは国内で販売されているアカデミックプライスのソフトウェアの紹介を行っています。

・ソフトの種類が多いですが選定が大変でしょう。

石野）このカタログには21分野で約800アイテムのソフトウェアを紹介しています。バージョンアップでの商品変更も含めると、毎年約70%位が入れ替わります。掲載商品の選定や編集作業にあたっては、全国の店舗担当者の協力を得ながら行っています。奥付には、協力いただいた担当者の方々のお名前を記載していますので、御覧になってみて下さい。

・編集で気をつけていることは何ですか？

石野）バージョン管理、動作環境の管理、価格の表記の3点に気をつけて編集作業をしています。また常に、組合員の皆さんがソフトウェアを探しやすい工夫を加えたり、特集記事等での情報提供を行っています。

・このカタログでの供給実績はどんな感じですか

石野）大学生協全体でのソフトウェアの供給高は、昨年度で約25億円です。平均単価が2万円程度ですから年間12～3万本ほどの供給でしょうか。メーカー別に見ると上位10社で約70%の供給をカバーしており、そのほとんどがこのカタログに掲載されている製品です。このカタログではそのような主要なメーカーの製品以外にも、専門的なソフトウェアも紹介しています。専門的なソフトウェアは店頭在庫できないことが多いので、このカタログが非常に役立っている様です。またここ数年は、このカタログには掲載されていない、海外でしか販売されていない専門的なソフトウェアの問い合わせも増えてきました。そのようなソフトウェアは、連合会CSチームが業務委託先と協力しながら、直接海外のメーカーに交渉を行い、取りよせを行っています。

・なるほど、「継続は力なり」と言いますが、教育や研究に必要なソフトウェアがこのような形で紹介されるのは、利用者にとってありがたいですね。

石野）そうなんです。全国の情報機器の担当者が手弁当で編集しているこのソフトウェアカタログが多くの教職員の方々のお役に立つことを願っています。

CIEC

『エデュケーショナルソフトウェアカタログ』
体裁 A4判、123ページ（2001年実績）毎年
10月発行、頒価 200円（税別）
編集・発行 全国大学生協連組合連合会
<http://software.univcoop.or.jp/>

を行っています。

運営委員会だより

文責 CIEC事務局 野口 孝

2001年度第3回運営委員会を以下の議題で開催いたしました。今までのNewsletterでは、開催報告を掲載していましたが、CIEC会員の方々に運営委員会の役割をより身近にご理解いただくために、報告形式を変更いたしました。

2001年度第3回運営委員会

日時：2002年5月26日（日）午前9時30分～午後1時 場所：大学生協杉並会館 2階203会議室
出席：奈良、佐伯、松田、生田、矢部、小野、綾、赤間、若林、板倉、筒井、野沢、匠、大野
今国（監事）、野口、西垣内、堀内、羽田（事務局）
欠席：湯浅、一色、武沢
議長：矢部 （敬称略）
議題：1.2002年度CIEC定例総会に向けての議案、運営等の検討
2.2002 P Cカンファレンス開催に向けての進捗確認等
3.その他

1. 2002年度定例総会に向けた議案、運営の検討

2002年度定例総会は、8月7日にP Cカンファレンス会場の1教室を使って実施されます。定例総会議案書については、理事会での議決を経てCIEC会員全員に配布されます。定例総会は、これまで1年間の事業活動を振り返り、2002年度の新たな事業計画を決定するためのものです。本年は、役員改選年に当たっており、事業計画遂行の財政的基盤である予算承認に加え、新執行体制の選任が行われます。

事業計画論議では、CIEC中期課題の具体化をどのように推進していくかが論議されました。具体的には、議案書の2002年度事業計画(案)および各専門委員会活動計画(案)をご覧ください。

また、組織基盤の強化検討に関して論議が行われ、具体的な提案については、運営委員会内にワーキングを設置し、秋に行われる運営委員会で提案をまとめることとしました。

CIECの活動計画全般について、些細な疑問や要望事項等でもかまいませんので、総会成功に向け、皆様のご意見をどしどしお寄せください。（議案書に発言用紙・意見要望用紙を添付しております）

2002年度CIEC定例総会のご案内

時：2002年8月7日(水)14:10～15:10 所：早稲田大学西早稲田キャンパス14号館
・役員選挙は投票用紙による総会前の事前投票制になっています。7月19日までに投函してください。
・定例総会に出席できない方は、必ず委任状または書面議決をお出しくださるようお願いいたします。
・出欠に関わらず、意見・要望を是非お寄せください。

2. 2002 P Cカンファレンスに関する討議

進捗状況を確認するとともに、P Cカンファレンスの成功に向けて、ITフェア/ITプレゼン協賛企業募集、参加募集、CIEC会員入会促進のための取り組み、団体会員への働きかけ等を積極的に進めていくことを確認しました。会員のみならず是非参加呼びかけなど、ご協力をお願いいたします。

また、P Cカンファレンス開催期間中、全体会会場前/受付コーナー横に、CIEC紹介コーナーを作りますので、是非一緒に参加される皆様にご紹介ください。

3. その他

- ・役員改選に伴い今期で会長職を退かれる奈良先生を名誉会員として理事会に推薦することを確認しました。
- ・「日本学術会議の在り方（中間まとめ）」について、佐伯副会長から報告を受けました。

以上

CIECメーリングリストから

(ciiec 01903) CIEC 外国語教育研究部会第4回研究会報告
(ciiec 01904) CIEC 第31回研究会報告
(ciiec 01905) 日本の教育事情を英語で説明
(ciiec 01906) RE: 日本の教育事情を英語で説明
(ciiec 01909 10) CIEC ML をご覧の皆様
(ciiec 01911) CIEC 小中高部会第11回研究会のご案内
(ciiec 01912) 2002PC カンファレンス参加受付開始のご案内
(ciiec 01913) CIEC 第32回研究会のご案内
(ciiec 01916 18) Re: 近畿大学理工学部経営工学科、近澤と
(ciiec 01919) reply-to field
(ciiec 01920 23) Re: 近畿大学理工学部経営工学科、近澤と
(ciiec 01923) 文部科学省と NHKから PCC後援承認されました
(ciiec 01924) Re: reply-to field
(ciiec 01925) シンポジウムの御案内 from Tokyo Institute
(ciiec 01926) Re: reply-to field
(ciiec 01927) おわび(右記メール) Re: Re: reply-to
(ciiec 01928) CIEC 役員選挙公示
(ciiec 01929) 2002 年度定例総会開催公示
(ciiec 01930) CIEC 役員選挙公示
(ciiec 01931) 役員選挙公示(ハガキ)の訂正のご案内
(ciiec 01932 36) CIEC 生協職員部会の設置に向けて
(ciiec 01937) ナイスな心意気! 生協職員部会設置に一票!
(ciiec 01938) Re: CIEC 生協職員部会の設置に向けて
(ciiec 01939 39) Re: 湯浅先生のご指摘(長文)
(ciiec 01941) CIEC 小中高部会 第11回研究会報告
(ciiec 01942^44) 著作権を考える事例
(ciiec 01945) FYI: summer seminar for e-Teacher
(ciiec 01946 51) Re: 著作権を考える事例
(ciiec 01952) 著作権と知的所有権に関して
(ciiec 01953) Re: 著作権を考える事例
(ciiec 01954) Re: ソフト添付のサンプル図の著作権
(ciiec 01955 56) Re: 著作権を考える事例
(ciiec 01957 58) Re: 著作権と知的所有権に関して
(ciiec 01959^60) Re: 著作権を考える事例

CIECで現在公開中のメーリングリスト

- 1) ciiec@ciiec.or.jp
コンピュータ利用教育に関する全般的な話題
- 2) ciiecn@ciiec.or.jp
ネットワークに関する話題
- 3) students@ciiec.or.jp
学内のコンピュータ環境改善をめざして学生院生の交流
- 4) information@ciiec.or.jp
お知らせ・宣伝
- 5) science@ciiec.or.jp
自然科学部会
- 6) ps-ed@ciiec.or.jp
小中高部会
- 7) sougou-ps-ed@ciiec.or.jp
総合学習研究会
- 8) f-lang@ciiec.or.jp
外国語教育研究部会

「カンファレンス プロジェクト」

への参加メールアドレス

confpro-ct1@ciiec.or.jp

CIEC会員の皆様

すっかり春の装いとなりました。皆様には新学期準備で何かと慌ただしい毎日をお過ごしのことと拝察いたします。

さて、CIECカンファレンス委員会では、新しく研究会や講演会などを企画、提案する組織として「カンファレンス プロジェクト」を立ち上げることにいたしました。

この組織は、かつて「カンファレンス委員会」としてメーリングリスト「confcomm」上で縷々情報交換や研究会に対する意見集約などを行っていましたが、CIEC発足の頃の胎動期から組織されていたこともあり、活動の運用や責任体制、また、組織メンバーの確定などが曖昧なままにおかれていました。近年では、このために殆ど機能しない状況に立ち至っていました。

この反省の上に立って、CIEC理事会(運営委員会)では、規約の整備や会員を中心に据えた新しい活動組織のあり方を検討し、その中の一環として、研究会企画や講演会企画など、CIECにとってもっとも会員の要求性の高い活動を支える場として「カンファレンス プロジェクト」を再構築し、日常的にはMLを中心にして意見、情報交換を図っていくことにしました。

この「カンファレンス プロジェクト」への加入は至って簡単です。以下のメールアドレスへ

「#subscribe」と本文に書いて送信して頂ければMLに登録されます。また、このMLから離脱する場合には「#unsubscribe」と本文に記述して送信してください。

なお、このプロジェクトはCIEC理事会のもとにカンファレンス委員会が責任主体となって運営を行います。

皆さんからの積極的な意見や要求によって支えられるCIEC研究会活動を、一層魅力あるものにしませんか。CIEC会員の皆様の参加をお待ちしています。なお、このMLへは、他に参加されているCIEC研究会や部会参加者であっても差し支えありません。

confpro-ct1@ciiec.or.jp

本文には「# subscribe」以外にお書きにならないでください。なお、この件での質問等はCIEC事務局 ciiec-jim@ciiec.or.jp までお寄せください。

CIECカンファレンス委員

△

2002PC カンファレンス企画概要

詳細は <http://www.ciec.or.jp/event/2002/> をご覧ください。

テーマ：「教育の情報化」以後の「情報教育」～情報教育の日常化～

全体会・シンポジウム

テーマ：共生と変動の時代を迎えた学校と教育

ゲストスピーカー	金子 郁容	慶應義塾幼稚舎長・慶應義塾大学大学院教授
	佐伯 胖	青山学院大学総合研究所所長・文学部教育学科教授
パネリスト	渡瀬 恵一	玉川学園小学部
	橘 孝博	早稲田大学高等学院
司 会	生田 茂	東京都立大学大学院 都立大学附属高等学校

CIEC小中高部会 情報教育シンポジウム

「小中高校大学における情報教育の一貫性を考える」

パネリスト	福島 健介	八王子市立別所小学校
	小久保 武司	千葉県総合教育センター
	川名 康央	千葉県立幕張総合高等学校
	川合 慧	東京大学大学院総合文化研究科
	福士 こう士	文部科学省初等中等教育局
レポーター	橘 孝博	早稲田大学高等学院
司 会	武沢 護	神奈川県立厚木南高等学校

プレカンファレンス

「教育の情報化の進展を支えとりくみ」

既存の教科・教育内容を前提として、教育方法における情報対応を考える「教科教育方法の情報化」の段階についての研究・実践はもはや広く普及したといっている。しかし、社会の情報化とメディアの進歩にあわせて授業形態や目的を変化させていくという「教科の内容・課程の情報化対応」といった面ではどうであろうか。本企画では、このような点に重点を置き、さらに高等教育現場も対象として活動をしているいくつかの団体の(自己)紹介と質疑応答を通して、教育の情報化について考えてみたい。

<紹介団体>

「特定非営利活動法人インターネット・ラーニングアカデミー」

「CIEC・大学生協連が進める電子教材専門委員会」

開催地企画

「学術・教科書を救うオンデマンド印刷の実際」

展示物 / ビデオ / 論文集抜粋プリントサービス / Book Parkデモ等を予定

大学生協企画

(1) 「教育 / 学びにおける、生協の役割と可能性」大学の学び、大学生協の役割を考える。

(2) Webワークショップ「簡単にホームページを作る方法の取得」

学生企画 「ホームページコンテスト」 in WASEDA

キャンパスツアー

イブニングトーク

ITプレゼンテーション

ITフェア

2002年度定例総会が開催されます

2002年8月7日 14:10~15:10
早稲田大学 西早稲田キャンパス 14号館

総会議案書をお送りしました

総会に出席されない方は「書面議決書」または「委任状」を事務局宛返信用封筒でお送りください。「意見用紙」もお送りしています。総会議案、CIECの運営全般に関わる事項でのご意見をお寄せください。

2002・2003年度役員選挙を行っています。投票をお願いします。

役員選挙投票用紙などをお送りしています。

各役職ともに定数内の立候補者数でしたので、信任投票となります。投票用紙の 枠に信任の方のみ「 」をつけ（「 」以外をご記入されると無効票になります）、投票用封筒に入れ、事務局あて返信用封筒で返送ください。

投票はすべて郵送による事前投票です。7月19日（消印有効）までにお済ませください。

投票用紙は2001年度会費を納めている方のみお送りしています。
2001年度会費納入をお忘れの方はお急ぎ納入をお願いいたします。

研究会報告

次の研究会を実施しました。

研究会の内容とまとめはホームページでご覧になれます。 URL <http://www.ciec.or.jp/>

小中高部会第11回研究会

テーマ 図書館というメディア --情報教育と図書館の関わり--

日時 2002年6月8日 13:30分～17:30分

場所 大学生協杉並会館 202.203会議室

参加者 25名（司書教諭の参加多数）

発表 「情報教育、メディア教育、学校図書館教育のカリキュラムとその射程」

--それぞれに構想されているカリキュラムを概観し、その射程（スコープ）を分析した上で、三者の統合の可能性を探る---

森田 英嗣（大阪教育大学）

「ICT in School Library」

---図書室から学習情報センター、メディアセンターへ、
学校情報化、司書教諭の情報化を切り口に考える---

瀬川 良明（北海道教育大学）

CIEC第32回研究会

テーマ インターネットによる遠隔講義～未来志向への魅力と課題～

日時 2002年6月22日 13:00～15:40

場所 早稲田大学 10号館

参加者 21名

発表 「distance learning～早稲田大学と18カ国35大学を事例に」

中野美知子（早稲田大学教育学部）

「インターネットによる遠隔講義の活用事例」

穂屋下 茂（佐賀大学理工学部）